

## 社説

新庄市は、秋田県湯沢、宮城県大崎の3地域と連携し、台湾で観光誘客キャンペーンを繰り広げてきた。日本の原風景が残り、四季折々の魅力を堪能できる地域として、現地の旅行会社は「山形県最上地域」に高い関心を示した。インバウンド（訪日外国人旅行者）誘客に向け、広域連携の絆を固くし新庄最上の魅力を台湾、韓国、中国などに発信したい。

少子高齢化に伴い、国内観光客の減少が予想される中、市は交流人口の拡大を目指し、初めて外国人観光客の誘客に乗り出した。県境を越えて交流する湯沢、大崎両市に呼び掛け、「新庄最上・湯沢・大崎地域インバウンド誘致キャンペーン台湾訪問団」を組織。先月、台湾最大の国際旅行見本市「台北国際旅行博2011」に初めて参加し、観光プロモーションを繰り広げた。

## 最上への外国人誘客

会場の台北国際貿易センターで3日間、団員たちは新庄まつり囃子(ばやし)を演奏。新庄まつりの法被を来場者に着用を体験させ、国指定の重要無形民俗文化財「新庄まつり」や最上地域の魅力をPR。おくのほそ道」と俳人松尾芭蕉、NHK連続テレビ小説「おしん」と最上川だけでなく、とりもつラーメン、手打

今後のインバウンド誘客にぜひ生かしていきたい。現地の旅行会社や、台湾で誘客活動を展開する日本の旅行関係者のアドバイスが大いにヒントになるのではないかと、「台湾人は魅力がない所には行かない」とし、「地元テレビや新聞、雑誌などで売り込むことも考えたい」「できれば観光ルートを提案してほしい」と

## 広域連携し魅力をPR

ちそはといった食文化も宣伝。最上川舟下り観光、肘折温泉、巨木、さつに湯沢、大崎両市の温泉や酒蔵、特産物など、恵まれた観光資源を台湾語で紹介した観光パンフレットも来場者に配った。また、台北市内の旅行会社を回り、3地域の魅力を売り込んできた。

現地でのPR活動の成果やヒントを、

いった助言や要望を参考に、これからのPR活動につなげてほしい。

最上8市町村は観光振興に取り組んでいるが、観光の広域連携となるとまだまだの感がある。松本観光コンベンション協会(長野)の担当者が「台湾での観光PRは誘客につながっている。隣接島の各地域と展開する広域観光はメリットが

大きい」と語るように、8町村が一体となつて湯沢、大崎両地域と足並みそろえて売り込んでいくことが必要だ。

最上の7町村もインバウンド誘客に関心を持って取り組みたい。せっかく魅力的な観光資源を持ちながらPR不足のため認知度はいまひとつ。訪問したくなるような観光パンフを一緒に作り、台湾に魅力を発信したい。その際、観光パンフレットにも知恵を絞って、台湾の人々が好む赤や黄、ピンクといった明るい色調で編集するなどの工夫が求められる。

県の外国人旅行者受け入れ実績調査によると、昨年、本県を訪れた外国人旅行者は約8万3700人。最上地域は約8700人で、約7割が台湾だった。台北国際旅行博で培った体験とノウハウを次のインバウンド誘客へのステップにしたい。ウェブサイトを多言語にしたり、宿泊施設の案内を分かりやすくするなど受け入れ態勢の充実も欠かせない。